

建てる前に、住民と苦勞する

全国を牽引する存在であれ

みのゝれ誕生の6年半前から、誕生後2歳になるまで、建設担当職員として歩みを見守り、育てた中村均さん（土浦市在住）。2002年の誕生を祝ってくれたお客様へ贈った記念品や、当時の写真を大切に保管。その宝物を見せてくれた中村さんに、インタビューします。



みのゝれオープニングスタッフ

なか むら ひとし
中村 均 さん

みのゝれと共に生活するスタイル
Minole Life
のすすめ
No.229

1992年、美野里町は健康館、文化館、図書館からなる「四季の里クリエイティブプラン」を策定。96年4月に四季健康館が開館してひと区切りとなり、「箱物行政」への批判も重なって、一旦お休みムードが漂っていました。そこへ島田穰一町長から返ってきたのは、「建てるまでに時間があるからこそ、対話を進めなさい」という言葉でした。

文化センター建設には逆風が吹いていました。「閑古鳥が鳴いているところばかりではないか」「本当に必要なのか」。そんな声の中で生まれたのが、「住民が関われるだけ関わって、住民参加のシステムそのものを文化センターづくりの成果にしよう」という発想。それが、逆風の中で

前へ進む盾になりました。中村さんたちは住民参加のあらゆる手段を実践し、賛成する人も反対する人も車座になって意見を聴き合いました。行政の苦勞は、住民からの批判や問題点の指摘に解決策を見いだし、実践すること。住民が完成まで無関心で、完成後に不満を言う「後出しじゃんけん」になれば、使い勝手の悪い施設を使い続ける苦勞を負います。建てる前に苦勞するか、後に苦勞するか。「私たちは前に苦勞する方を選びました」。

一番の苦勞は、対立を対話にすること。外部の専門家は、行政と市民の言い分を冷静に判断し、双方に对立感情を残さず伝える「翻訳機」となって、言葉にできない思いをつないでくれました。「この人たちがいなかったら、みのゝれは今のような形にはできなかつた」。できることをやり尽くす。その熱量

が伝わるにつれ、住民にも「自分たちも一緒にやらなければ」という気持ちが芽生え、「参加」から「参画」へ、そして「主体」へ。みんながみのゝれ誕生を待ち焦がれるようになりました。その積み重ねが、現在の「対話の文化の拠点」みのゝれを育みました。

そして、こんな期待も寄せてくれました。合併後の全国では、複数の文化施設を持つ自治体に統合や廃止、機能分担が求められ、小美玉市にも3つの文化施設があります。建てた時の市民参加は全国的に評価されてきました。だからこそ今度は、整理するうえでの市民参加、小美玉モデルをつくってもらいたい、と。「これまでの歩みを整理しながら、新たな『みのゝれスタイル』をつくり上げ、これから全国を牽引する存在であってほしい。それが、これからのみのゝれの新たな役割だと思っています」。